

教職実践演習（中・高・栄）の報告

広島文教女子大学人間科学部

グローバルコミュニケーション学科	教授	笹原豊造
人間福祉学科	教授	菅井直也
初等教育学科	准教授	白石崇人
人間栄養学科	准教授	藤井紘子

0 本演習の方針

教職課程履修の集大成として、教員として最小限必要な資質能力を明示的に確認するとともに、今後の教員生活でそれらを確実に身に付ける一助となることを目的とする。そのために、教員として求められる4つの事項（①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項②社会性や対人関係能力に関する事項③幼児児童生徒理解に関する事項④教科等の指導力に関する事項）を視野に入れて運営する。

これらを達成するために、以下の項目を運営の指針とする。

1. 講義形式は極力避け、演習や事例研究、グループ討議を組み合わせる。
2. 複数の教員の協力方式で実施し、多面的な意見交換ができる場を設定する。
3. 教育に関わる諸問題についての歴史的経緯を概観する。
4. 最新の教育に関する動向を踏まえ、教育が社会に占める意義を確認する。

（参考 中央教育審議会 初等中央教育分科会 教員養成部会配布資料）

1. 活動スケジュール

回	活動内容	回	活動内容
1	教職実践演習ガイダンス	2	課題についての自主活動
3	課題についての自主活動	4	課題についての自主活動
5	課題についての自主活動	6	現場の教師に学ぶ（特別支援教育）
7	「私の心に残る教師」発表・討議（1）	8	「私の心に残る教師」発表・討議（2）
9	課題についての自主活動	10	課題についての自主活動
11	「学校の直面する課題」発表・討議（1）	12	「学校の直面する課題」発表・討議（2）
13	課題についての自主活動	14	課題についての自主活動
15	道徳ワークショップ（1）	16	道徳ワークショップ（2）
17	課題についての自主活動	18	課題についての自主活動
19	「学級づくり模擬授業」発表・討議（1）	20	「学級づくり模擬授業」発表・討議（2）
21	課題についての自主活動	22	課題についての自主活動
23	保護者・地域対応ワークショップ（1）	24	保護者・地域対応ワークショップ（2）
25	課題についての自主活動	26	課題についての自主活動
27	「教育関連の時事問題」発表・討議（1）	28	「教育関連の時事問題」発表・討議（2）
29	課題についての自主活動	30	まとめ「私の目指す教師像」

2 活動の概要

(1) 教職実践演習ガイダンス

①活動のねらいおよび実際

教職実践演習は「教職課程の履修の全体を通じて身に付けるべき資質能力を最終的に形成し、その確認を行うための総合実践」として位置づけられる。ガイダンスでは、学生が本演習の意義を理解するための説明を行い、そして、スケジュールや各テーマにおける課題等の授業の進め方について説明した。特に、本演習の目的を達成するためには主体的に取り組むことの重要性を強調し伝えた。

(2) 「私の心に残る教師」

①活動のねらいおよび実際

この活動は「教員として資質能力の最終的な形成と確認」のための導入として位置付けられる。これまでに出会った優れた教師について「私の心に残る教師」のテーマで発表し、質疑応答を行う。この段階では、いわゆる「教員に必要な資質能力」について明示的には認識していないであろう。個々の発表から、「優れた教師に共通する資質能力」を抽出する作業を通して、本演習の意義を確認する。

本演習のまとめとして、最終回には「私の目指す教師像」をテーマに、教師として必要な資質能力についてグループで討議を深める予定である。この段階で、教職実践演習が設けられた目的の一つである「教員の資質能力を明示的に確認する」ことを目指したい。

②学生のレポートより

○私の心に残っている教師は、高校時代に出会ったT先生です。私は、T先生との出会いをきっかけに教師を目指すようになりました。なぜT先生が一番心に残っているのかという理由は3つあります。まず1つ目は、私たち生徒のことをよく理解してくれていたからです。学校の中でもトップクラスでこわいと言われていたT先生は、私が所属していた女子バスケットボール部の顧問の先生でした。バスケットボールの技術面はもちろんですが、精神面や学校での生活面もしっかり指導してくださりました。いつでも私たちと真っ向から向き合ってください、T先生は私以上に私のことを分かっているように感じていました。とても厳しい指導を受けましたが、私たちはT先生をとっても信頼し尊敬していました。

○中学校時代、心の底から尊敬していた先生は私の担任の先生だった。問題の多い私たちの学校に来て、全員と全力で向き合ってくれるような熱意あるところが印象的な数学教師だった。振り返ってみると、生徒のこころを掴む教師になるためにはいくつかの共通項があったように思う。一つ目は、公平さである。誰に対しても態度を変えず接する教師はクラス中から人気で、逆を言うと、一部の生徒を叱りすぎたり褒めすぎたりする教師は生徒間ではよく不平の声が聞こえていた。

(2) 「現場の教師から学ぶ」

①活動のねらいおよび実際

「特別支援教育の今日的課題」のテーマで、特別支援教育について古田寿子氏による講演が行われた。現場に根差した講演内容は、学生に特別支援教育の困難さを実感させるだけでなく、その底流に流れる考えは、あらゆる教育活動の基盤であることを認識させた。多種多様な障害を個性として認識し、個性に合った教育を図る姿は学生に感銘を与えた。

②学生のレポートより

○事例から学ぶことがたくさんあると感じた。教師として知っていなければならないこと、理解しなくてもいいことがあり、それらが事故を未然に防ぐのだと思った。自閉症スペクトラムの特性をたくさん挙げてもらい知ることができて良かった。知っているだけでも接し方を考えて行動で

きと思う。子どもたちから教わることもたくさんあるのだと改めて感じる事ができた。ADHDに効果的な薬があることを初めて知り驚いた。言葉であったり、行動であったり、道具であったり、相手の合ったアイデアが必要だと思った。

- 特別支援教育の実際を具体的に学ぶことができた。自閉症の児童等について、“興味のあることを大切に”という言葉が、いちばん印象的であった。教育実習で支援学級に在籍する児童に対して、担任の先生がその児童の興味関心を大切にしていた印象があった。その理由が理解できた。具体的に視覚的に伝えることで、自閉症の児童も理解しやすく伝えやすいことがより詳細に学ぶことができた。教師自身が自閉症スペクトラムの児童をまず詳しく理解しなければならぬと感じた。児童の行動を肯定的に捉えて、その児童がのびのびと成長していければいいのかなと思った。

(3) 「学校の直面する課題」

①活動のねらいおよび実際

この活動のねらいは「今日教育課題を議論する際に不可欠な事項について、可能な限り共通の認識を共有すること」にある。いじめ問題、こどもの貧困など教育に関わる諸課題の背景にある問題点、歴史的経緯などを確認した。

学生ひとり一人に以下のテーマで調査し発表させた。発表後、質疑応答を行った。各テーマ(発表順)は「大学入試改革」、「いじめ」、「教科書無償」、「中央審議会」、「就学支援」、「教育基本法」、「君が代・日の丸」、「学力テスト」、「学習指導要領」、「教育委員会」、「小学校英語教育」、「教科書検定」、「多忙な教師」、「教育公務員の地位」、「ゆとり教育の功罪」である。

②学生のレポートより

- 「学力テスト」私自身は学力テストの結果を公表することに反対です。なぜかという、公表することによって、市町村、学校、校区が序列化されてしまうからです。序列化されることによって、文科省が目的としていた「教育の改善を図る」ことが阻害されると考えられます。公表を容認する背景には、保護者の間で公表を求める声が強く、その意見を無視し続けることは厳しいものがあったのではないかと想像されます。

もう一つは費用の問題です。全国の小学6年生、中学3年生を対象とする悉皆調査にするべきか、何校かみの抽出調査にするべきかという問題です。毎回この学力テストには巨費が投じられており、一部の抽出調査で十分であるという意見があります。一回の学力テストにつき50～60億の費用がかかります。費用対効果を考えると疑問が出てきます。ほぼ全員に受けさせることに隠された政治的な意図があるのでしょうか。

- 教育公務員は地方公務員や国家公務員と職務の性質上で区別され、その職務に対する責任から専門職と見なされるべきであるとされているが、実際の教育現場では教員の地位が低くなりつつある面がある。例えば、保護者の高学歴化によって以前のように「教員＝賢い・すごい」というイメージは弱くなった。また、教員が起こす不祥事によって教育公務員や学校に対する信頼が失われ、教育公務員の地位低下の一因にもなっているのではないかと考えられる。

(4) 「道徳ワークショップ」

①活動のねらいおよび実際

本時のねらいは、現代的課題(情報モラル・いじめ問題)に関わる事例に基づき、道徳教育についてグループで考えることである。また、事前に、平成27年3月一部改訂版の中学校学習指導要領第1・3章を読んで、中学校の道徳教育のあり方についてまとめ、わかったことを考察する課題を課した。当日は、まず事前課題の確認・共有を行った。特に「特別の教科 道徳」設置のねらいや特徴などについて、重点的に確認した。また、道徳科の評価規準について、平成28年7月22日の道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議報告書に基づいて簡単に解説した。次に、中学校における現代的

課題に関する事例を提示し、自分の考えをまとめてからグループ討議に入った。討議の結果は、グループごとに発表し、クラス内で共有した。考察・討議は、個別指導と全体指導や、保護者との連携、全体計画などの具体に関わる問題に沿って行った。

②学生のレポートより

○今回の道徳教育の改定〔改訂〕は、いじめの問題への対応が契機となっている。核家族化やインターネット、携帯電話などの普及により、コミュニケーションツールは時代の流れとともに大きく変化している。そのため私は道徳教育を通じて、複雑で困難な問題に現実で直面した時、対応できる能力を身に付けることが求められているのではないかと考える。また、周囲の状況にあった判断力を培うことが求められていると考える。

○私は担任として、道徳の時には生徒が自分自身の生活を振り返って課題をみつけ、それに対して考えたり、友達を〔と〕意見を交わす中で考えを深めたりすることができるような授業をしたい。さらに、外国語科の英語の特徴をいかして、英語の授業でも問題解決的な授業を行い、生徒が多様性を受け入れる体験をさせたいと思う。

(5)「学級づくり模擬授業」

①活動のねらいおよび実際

教員の仕事の中で、授業や校務分掌とならんで、大きなウェイトを占める学級担任の仕事のレディネスをつくることを目的として、昨年度同様に、新学期の生徒と担任教師の対面の日またはそれにつづく「学級開き」を想定した10分間のマイクロティーチングを実施した。校種・学年・クラスサイズ・所在地などの実態は自由に想定して計画する。その後、指導案や構想の提示をも踏まえて、相互に講評して議論する。

今年度の受講学生の想定した学級は、小学校4年生・5年生・6年生・中学校1年生・2年生・3年生。小学校の低学年や高校を想定した者はなかった。

ほとんどの学生が、自己紹介などにゲーム的要素を取り入れていたのと、マイクロティーチングならびに議論の中に「居心地の良いクラス」という発言が複数あった点が、目立った印象である。

②学生のレポートより

- ・ひとりひとりの児童の様子を気にかけて、児童に寄り添った学級づくりとなるように気をつけて進めていく必要があった。
- ・事前に児童の顔と名前が一致するように覚えておくことが関係づくりの第一歩として重要なのだと思った。

(6)「保護者・地域対応ワークショップ」

①活動のねらいおよび実際

本時のねらいは、学校・教師に対するクレーム対応に関するロールプレイングを通して、保護者・地域対応の擬似的経験を行うことである。また、事前に、学校と保護者または地域との関係についてのニュースを履修生自身で選定し、どのような問題や可能性があるか考察する課題を課した。当日は、まず事前課題の確認・共有を行った。次に、教育現場におけるクレーム対応の特徴・背景について確認し、事例に沿ったロールプレイングを2セット行った。ロールプレイングは、4名ずつグループに分かれ、保護者からのクレームに関する2つの事例からグループが選択した事例に沿って行った。グループでは、それぞれ担任役・校長役・保護者役・観察者（記録係）に分かれてロールプレイングを行った。ロールプレイング終了後、どのような気持ちで応答したか、相手方にどのような気持ちや本音があると感じ取れたかなどについて話し合った。その後、グループ内の立場を入れ替えてもう一度ロールプレイを行い、終了後に話し合いを行った。履修生は、高校までやアルバイトなどで実際に見聞きした経験などを生かしてロールプレイに取り組み、事後の話し合いで「あのときどうすればよかつ

たか」など、具体的な対応方法を吟味していた。なお、ロールプレイングは保護者・地域対応の大変さを実感する機会になったが、事前課題は学校・家庭・地域連携の重要性なども考える機会になった。

②学生のレポートより

○些細なことにもクレームをする保護者がいることで、教員間では一層緊張感がはしり、過度な対応をしてしまう。このような環境下での職務は心労が計り知れない。休みも十分でないとするれば、いつそれが回復できるのだろうか。家庭は家庭として最低限のしつけなどの責任を負うべきであり、学校は保護者との信頼構築をする場を設ける必要があるとそうである。また、保護者も学校とともに「子どもを」育てていく意識を持つべきである。

○「小学生の保護者からあいさつしないことが提案されたというニュースを受けて」地域の人に見守られながら安全な地域を作ることが子ども達の身の安全を守ることであると考え。そのため、あいさつは欠かせないものであり、最初からかかわりを断ち切ってしまうと、見守ってくれるはずの地域の人を失い、孤立した社会を促進しかねない。[略] 周りとのかかわりを最大限に減らすのではなく、むしろあいさつから広がる地域のネットワークを活用し、子ども達の身の安全を守ることこそが今後目指していくべき姿であると考え。

(7) 「教育関連の時事問題」

①活動のねらいおよび実際

目先の授業や学級経営の出来事に没頭するあまり、校外の社会情勢の流れに無頓着になっている教員「ではない」センスを磨くことを目的に、前年中（2016年1～12月）の教育関連のニュースや話題になった事柄を選んで、報じられている事実を要約した上で、その背景や本質を調べて考察し、解りやすく発表することを課した。

少なくとも教育に関するニュースについては、児童生徒・保護者などに尋ねられたら答え得なければならぬ。物事には必ず、社会的・歴史的背景が存在するわけで、つたなくともこれを探ることも期待された。

受講学生が取り上げたのは、下半期それも年末近くに報道されたものが多かった。「早期英語教育」「睡眠教育（事例報道）」「防災マップづくり（事例報道）」「図書給食」「給食異物混入（事件報道）」「不登校児への支援（教育機会均等法ほか）」「震災いじめ（発覚報道）」「子どもの貧困」「過労教員の公務災害（判決報道）」「部活動休養日（文科省通知報道／正確には2017年になってからの発出である）」「給付型奨学金制度」。報道のトレースに終わったものが少なくないが、そもそも関心が薄いところにニュースへ直面せざるを得ない課題の故であろう。考察ならぬ感想して、報道を肯定しているものが殆どだったのは、「科学的考察」「健全な批判力」の視点からの課題である。

②学生のレポートより

- ・教員は、授業での勉強だけではなく、生活習慣も指導していかなければならないと思った。
- ・自然災害の継承は大切なことなのではないかと思った。
- ・食育と読書活動を繋げた取り組みは、新しくて面白いし、両方にメリットがあって良い取り組みと思った。全国的に広がっていくのが楽しみである。
- ・学校、家庭、地域が相互に協力して、不登校児童が減少するような取り組みをしていかなければならないと考える。
- ・学校内にとどまらず、学校外でも専門家や地域全体で子どもたちを見守っていかなければならないと今回の記事を通して感じた。

(8) 「私の目指す教師像」まとめ

①活動のねらいおよび実際

この活動のねらいは「優れた教師に必要な資質・能力」を

②学生レポートより

○私はこの授業全体を通して教員に必要な資質は協調性、柔軟性、信頼、授業力、積極性であると思った。そして、特に私が必要である資質は協調性と柔軟性であるということをこの授業を通して学んだ。

教員という職業は自分の専門外のことにも、積極的に関わり、携わっていかなければならない仕事であるが、教育は終わりがなく、ゴールもない。だからこそ自分自身も生徒と共に学び続け、時には生徒から学びながら、ともに成長することのできる職業であると改めて感じた。

○この授業を通して、これまで目指してきた教師像が少し変わった。私がこの授業で学んだ目指す教師に必要とされる資質は、観察力、協働力、授業力、情報収集能力、コミュニケーション能力の5つである。私はこれらの能力を兼ね備えた教師になりたい。(中略)

コミュニケーション能力は教師にとって不可欠な能力である。この授業で習ったように、保護者の中にはクレームをつけてくる親もいる。しかし、その裏には経済的側面、環境的側面などをはじめとする様々な要因があるだろう。教師は保護者と協力しなければ教育は成功しないので、保護者との良好な関係づくりのためにも保護者と関わることを恐れずに、しっかり話を聞き、より生徒のことを知っていくことに努めるべきであろう。

3 反省と課題

本演習では、学生は子ども・学校・教育に関わる問題の様々な課題に対し、事前学修を行った上で授業に参加し、発表や話し合いを重ねることを通して、教師を目指す学生に求められる事項について主体的に多くの学びを得たものと考えられる。一方、学生の発表の中で、各自の発表で用いる用語の意味を適切に理解できていなかったり、考察が十分でなかったりする場面も見受けられた。学生の学びをより高めるためには、発表する上でその内容を自分自身が十分に理解することの必要性を、これまで以上に強調して員が学生に伝えることが重要である。